

夏目漱石『いづる』と「心の癖」

— 実感的定番教材論 (5) —

雲雀丘学園高等学校 田中 武夫

漱石的主人公の特徴

夏目漱石の小説を読んでいると、その主人公たちの多くが決定的な場面でぐずぐずして優柔不断な態度しか示さないもので、私たち読者はしばしば苛立ちを覚えることになる。

批評家の柄谷行人氏^{かたじけなく}はかつて「意識と自然」(『増補 漱石論集成』平凡社、二〇〇一)。なお柄谷氏の文章は以下全てこの書からの引用。)という評論で、漱石の小説は「主題が二重に分裂しており」「それらが別個に無関係に展開されている」感があると述べた。つまり、『門』の宗助の参禅や『ころ』の「先生」の自殺は小説内部の論理からは出て来ないものだといいたいのだ。続けてそこに「内在的な条件がある」と考えるべきである」とする柄谷氏は、T・S・エリオットが『ハムレット』を論じた際の「この劇には『客観的相関物』が欠けている」という指摘を引用し、漱石の小説にも「客観的相関物」が欠けており、「漱石も『彼の手に残る問題を扱おうとしたと結論する』ことができる」とする。

私もこの考えに同意する。なぜなら、漱石的主人公たちのぐずぐずした態度も小説内部の論理からは説明がつかず、まさに「客観的相関物」に欠けたものといえるからだ。

ぐずぐずの理由

それではなぜ漱石的主人公はそのような優柔不断な態度を取ってしまうのか。その答えを初めて明瞭に示したのが三浦雅士^{みやまじ}氏の画期的な評論『漱石 母に愛されなかった子』(岩波書店、二〇〇八)である。

三浦氏はその書の冒頭で、「漱石は母に愛されなかった子だった、少なくとも漱石はそう思っていた」と述べる。その例として『坊っちゃん』の主人公が母に「おまえのようなもの顔は見たくない」と怒られて親戚の家に泊りに行っている間に母が死んでしまうというエピソードを挙げる。ここから、「じゃあ、目の前から消えてやるよ」という「拗ねている、僻んでいると受け取られてもしょうがない行動」をつい取ってしまったて「愛されていると信じたい、

そのことを確かめたくてしたことが、ことごとく裏目に出てしまう」ような主人公の行動のパターンを抉り出してみせる。

『坊っちゃん』の主人公の起こす騒動が全てこの行動形式から生まれているというわけだが、そのような心理が生じる原因については小説の内部にはやはり見出せない。つまり、テクスト内に「客観的相関物」が欠けているのだ。

漱石的主人公の出来上がり方

三浦氏はそこで漱石の伝記的な事実注目する。漱石の自伝的小品『硝子戸の中』では、漱石が生まれてすぐに古道具屋に里子に出されるという告白がなされる。そして古道具屋から取り戻された後は養子に出されるという話が続き、しかし「その養家のごたごたで実家に戻るというようなことになり、三浦氏は「これでは子が拗ねないほうがおかしい。僻まないほうがおかしい」と同情する。続いて、「素直でないから可愛がられなかったと漱石は書いているが、とんでもない。原因と結果が逆である。可愛が

られなかったからこそ素直になれなかったのだ」と結論づける。要するに『坊っちゃん』の主人公の性格の起源はここにあるというのだ。

そして、この性格はより一般化してみれば「自分には母からも誰からも愛されているという自信がない」ということになるだろう。だから誰に対しても関係を深め得る最後の一步を踏み出すことができない。漱石の主人公が「ぐずぐず」するのはこの性格（三浦氏は後に「心の癖」と表現する）に原因があったといえる。こうして三浦氏はテクスト外に「客観的相関物」を見出すのだ。

ここまでの論述で漱石の主人公の出来上がり方は漱石自身の「心の癖」をそのままトレースしたものだ」とまとめることができる。

『三浦氏』における「心の癖」

この漱石の主人公の「心の癖」は小説『ころ』(引用はちくま文庫、一九八五)ではどう発揮されたか。

「下 先生の遺書」で、大学生の頃の「先生」は軍人遺族の未亡人の家に下宿することを決める。そこには年頃の美しい「お嬢さん」もいた。そして、「先生」はどんどん「お嬢さん」に惹かれていく。同じ屋根の下に暮らすうちに「奥さん」や「お嬢さん」からも好意のサインが幾度となく示されるが、「先生」は以前に叔父に騙された経験があつて今一步関係を深めること

ができない、かのように話は進んでいく。しかし、私たち読者は本人のことは全て信用してはならない。やはり漱石の主人公らしく、本当は「先生」は「お嬢さん」に愛される自信がないのである。だから、「先生」はやはり「ぐずぐず」して事態は先に進まない。

Kの召喚の意味

ここで「先生」は最終手段に出る。同郷の大学の友人で経済的に困窮していたKを自分の隣の部屋に下宿させるのだ。

この「先生」の行為については社会学者の作田啓一氏が『個人主義の運命』(岩波書店、一九八二)でR・ジラルルの理論をもとに説明している。簡単にいえば、「自分が何かを欲望するのは、他人がそれを欲望するからだ」という原理である。これを『ころ』の人間関係に応用してみるとどうなるか。主体である「先生」が対象である「お嬢さん」を愛するには媒介者のKの「お嬢さん」への愛情が必要である、ということになる。作田氏はこれを、「お嬢さんが結婚に値する女性であることを、尊敬するKに保証してもらいたかった」と読み換える。つまり、「先生」は「お嬢さん」からの愛情に確証はないとしても、Kの「お嬢さん」への愛情を根拠にして自分の「お嬢さん」への愛に確証を得たかったのである。しかし、これは同時にKを恋のライバルに仕立てることを意味する。

私が「先生」のKの召喚を最終手段と呼ぶのはこういうことである。

Kの運命

しかし、柄谷氏が講演「漱石の多様性」で述べるように「お嬢さん」に対する先生の恋愛には、たしかにこの第三者のKが必要でありながら「この第三者は排除されなければならない」のである。結局、形の上ではKは排除し自殺に追い込まれるやり方なのだ。「先生」が無意識にやってしまったこととはいえ、この結果に「先生」が罪の意識を抱くようになるのはいうまでもない。

ここで私は柄谷氏が時に応じて引用する漱石の次の断片が気になって仕方がなくなる。

二個の者が same space を occupy スル訳には行かぬ。甲が乙を追ひ払ふか、乙が甲をはき除けるか二法あるのみぢや。甲でも乙でも構はぬ強い方が勝つのぢや。(中略) 文明の道具は皆己れを節する器械ぢや。自らを抑へる道具ぢや、我を縮める工夫ぢや人を傷けぬ為め自己の体に油を塗りつける(の)ぢや。凡て消極的ぢや。此文明的な消極な道によつては人に勝てる訳はない。(中略) 勝つと勝たぬとは善悪、邪正、当否の問題ではない——power である will である。(明治三十八—三十九「断片」)

これこそKが最終的に排除される運命にあったことの理屈ではないか。かつて蓮實重彦氏は『反日本語論』（筑摩書房、一九七七）において、さりげなく「排除」と「選別」による西欧的殺戮行為について述べていたが、漱石は蓮實氏のいうところの西欧的「排除」と「選別」という残酷な原理を既に身をもって認識していたことが知れるだろう。漱石は日本が文明開化の名のもと能天気に入力していた西欧的なものの別側面が日本においても作動しつつあったことを小説に取り込んでいたのだ。

こうして「他者に愛される自信がない」という「心の癖」のテーマは「排除」と「選別」という西欧的原理に繋がっていったのだ。『心』の悲劇は一人の人間の「心の癖」が西欧的原理と出会うことで生まれたものであると、ここでとりあえずまとめておくことができる。

漱石的主人公の自閉性

松元寛氏は名著『漱石の実験』（朝文社、一九九三）で漱石的主人公の特徴が「漱石独自の人間関係感覚とでも言うべきものの所産」としての「精神の自閉性」にあると指摘する。これは主人公たちは困難な状況に直面するとなぜかそれに対処せず内側に逃げ込むことをいう。（なお松元氏はこの概念を病的な意味を持つものとして用いていない。）

私が考えるに「精神の自閉性」とは、三浦氏が精緻に分析した「心の癖」というものをより一般的・客観的に表現したものと考えてよいと思う。要するに、他人に愛されているという自信がないので内面に退却する＝自閉するということわけだ。

ただ松元氏の『漱石の実験』は漱石的主人公の心の特徴を指摘するのが目的ではない。漱石の小説を、作家自身のものといえる自閉的状况からいかに脱出するかという様々な思考「実験」を行ったものと捉え、その実験内容を吟味しようとするものなのだ。

「精神の自閉性」の開放に向けて漱石がやらなければならなかったのはまずその自閉した心を対象化することであった。松元氏は、漱石が「坑夫」という作品によって「事件の当事者である『自分』を、離れたところからもう一人の『自分』が眺めるといふ構造」の作品を書くことができた、と述べる。これは、漱石が自分の「自閉的状况」そのものを対象化する方法を獲得したことを意味する。漱石はたまたまある青年が小説の題材にと持ち込んできた身の上話と出合い、『坑夫』を執筆したことによって自身の人生、あるいは作家としての課題を突破するヒントを見出すことができたといえるだろう。

「精神の自閉性」の終着点

松元氏は、その方法の応用によって「対象化

した自己を仮構の三人称の主人公に描き込むのに成功した」ものとして『三四郎』を挙げる。続けて『彼岸過迄』において互いによく似た敬太郎と須永という二人の人物を作り、敬太郎に視点を据えて須永を観察するというやり方に取り組んだとする。まさに自分で自分を観察するという方法である。

このやり方は『行人』の一郎、二郎へと展開され、自閉状態の根底にある「死ぬか、気が違うか、夫れでなければ宗教に入るか。僕の前途には此の三つのものしかない」（一郎のことば）という心境にまで作家は迫り着く。これが漱石の解明した「精神の自閉性」の行き着く先といったものである。しかし、この先には何もない。「精神の自閉性」自体の対象化は結局、内面を探ってもそこに何の解決策も見出せないことを明らかにする実験だったといえる。

それでは次にどうしたらよいのか。勿論、作家は主人公たちが精神の外に出る方法を模索しなければならぬ。しかしながら、自閉した心の外に出ることはなかなか難しい。安易にやると『それから』の代助や『門』の宗助においてのように、それこそ「現実の自閉化」ともいえるべき事態になってしまう。そして漱石がこの困難な課題に挑戦し何とか解決しようとしたのが『心』という作品なのだ。

「先生」の「精神の自閉性」

『「ころ」』においても作者漱石は互いに似た二人の人物を主人公にする。「先生」と大学生の「私」である。ただ、今回は視点としての「私」を「先生」に直接に関わらせて二人に親密なコミュニケーションを重ねさせる中で「精神の自閉性」を破る道を探ろうとするのだ。

松元氏によれば、『「先生」』は、自分に地位や名誉を与えてくれるかもしれぬ（他人の世界）を断念することと引き換えに、Kを裏切って死に至らしめた責任を負うたまま「御嬢さん」との「愛」を実現することによって、「自分の世界」を守り続けるという道をとろうとする。だから『「私」という青年に出逢うまで』『先生』は「問題を回避し続けることしかしていないのである」。つまり、「先生」自身のことばでいえば「死んだ気で生きて行こう」という決意そのままの人生であるのだ。まさに「先生」はこれまでの漱石的主人公と同型の「精神の自閉性」を持つ人物として作られている。

そのような人間の前に若者の「私」が現れる。その閉じた心を開くために。変化は外部からやってくる。

自閉性の突破

それではどうして「私」は結果的に「先生」の自閉性を突破できたのか。それは松元氏が述べるように作家が互いに似た二人の人物を配す

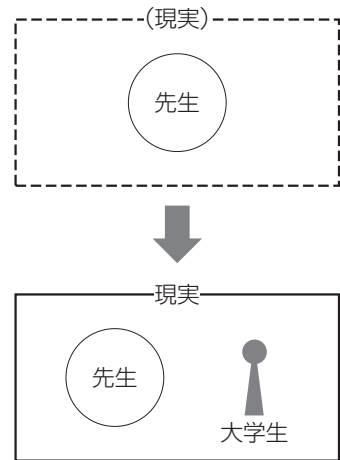


図1

るといふ「実験」の工夫から可能になったのである。

世間的他者に対して極端に臆病に見えた「先生」が次第に「私」を自身に近づけ得たのは、松元氏のいうように、「私」がかつての「先生」自身であつたからである。自閉的な人間にとつて世間的他者はコミュニケーション不能のエイリアンに過ぎないが、過去の自分は一種の他者ではあるものの対話可能な存在であるといえる。そこに三浦氏のいうところの「相手に愛されているか」といふ「心の癖」が発動する心配もない。その「私」に対して「先生」は自分の過去を語っていく。「上 三十一」で「先生」は「私」に対して「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つていて。あなたはそなた一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目です

か」と問いかけてから自分の過去を語ることを「私」に約していた。それを遺書で実行するのである。

ここに示されているのは自閉性の開きである。まず自閉性の開きは他者への信頼から開始されるといえる。そしてそれは客観的な現実世界の明確化へと繋がっていく。(図1)

「先生」が死にたい理由・死ねない理由

「先生」が自殺を志向する理由は、遺書ではつきり述べられているように、自分の財産をこまかした叔父をあれほど軽蔑しておきながらその自分が親友Kを裏切るようなことをしてしまつたことからくる自分への愛想尽かしである。後にKの自殺の原因は「お嬢さん」のことで出し抜かれたことからくる絶望によつてではないと思ひ直していくものの、やはり「先生」がKを裏切つたことは間違いない。「先生」はそれを「人間の罪」といふ。

しかし、「先生」はKの死後、「自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだ」(下五十四)と思ひながらなかなか死ねない。

冒頭で触れたように、柄谷行人氏は「意識と自然」で「先生がなぜ死ななければならぬのか」といふことは、おそらく作品そのものからは理解できないはずだ」と述べている。つまり、「先生」の自殺願望に「客観的相関物」がないというのだ。私も改めてこの考えに半ば同意す

る。なぜなら、「先生」はKが死んだ後も自殺を考えながら長い間死ななかつたのだから。

一方で、私が考えるに、「先生」は世間的にも人間としても自分のやったことは罪であるとは分かっていながら、どうしてこのようなことを自分がやってしまったのか、どうしてこんな事態になってしまったか、ということについては納得がいっていないのだ。だから死ねないのである。つまり、「先生」が死ぬる「客観的相関物」は途中までやはりテキスト内に見出せないのである。実際のところ、『「ここ」』という小説はこの「客観的相関物」を探す物語だといえる。そして、その「先生」の納得のいかなさを腑に落ちるようにしてくれたのが大学生の「私」なのである。

過去を語る理由(1)

「先生」が大学生の「私」に語りたかつた過去の内容とは自分及びKを巡るものであった。ある種、自分の恥部ともいうべきことを含めてここで「先生」が明らかにするのは、遺書の最後にあるように「他の参考に供する」、つまり大学生の「私」が自分たちと同じ間違つた道を歩まないように「生きた教訓」を与えるためである。

その自分たちの間違いとは、私が考えるに「自由と独立と己れとに充ちた現代」(「上 十四」末尾の「先生」のことば)での生き方を自

分もKも失敗したことを指すだろう。

その失敗の最たるものは先に整理したように、「お嬢さん」を巡って形成された「三角関係」において「先生」とKがドタバタ劇を演じてしまったことである。それはKの死によって悲劇的に終わってしまう。問題は、今から考えれば、自分たちはどうしてあのように考え行動してしまったのか、ということだ。そして「先生」は既にそれに一つの答えを出していた。Kの死後かなり時間が経って「先生」はKの死因を「Kが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた結果」(「下 五十三」のことば)と推測する場面があるが、重要なのはその「淋しさ」の正体である。それを説明することが失敗の内容の理解に繋がるだろう。

過去を語る理由(2)

一方で、私は、「先生」が自分が何者であつたかを過去の「自分」(大学生の「私」)に語ることで自分の存在の意味を確認していくことになつたと考える。それは具体的には自分が現在なぜこのような状況に陥り込んでしまったのかを悟ることであつた。

先ほど、「先生」の納得のいかなさを腑に落ちるようにしてくれたのが大学生の「私」である、と述べたのは、彼が親密なコミュニケーションを続ける中で「先生」のこの意図されざる作業の協力を図らずもなし得たことを指す。

ここで私は、「先生」が、哲学者J・ドゥルーズのいう「無人島」のような存在だつたように思われてならない(「無人島の原因と理由」『ドゥルーズ・コレクシオンI』河出書房新社、二〇一五)。「無人島」には他者がいないので自分が何者か分からない。他者が現れてこそ自分が自分だと分かる。だから大学生の「私」はフライデーであつたのだ。(図2)

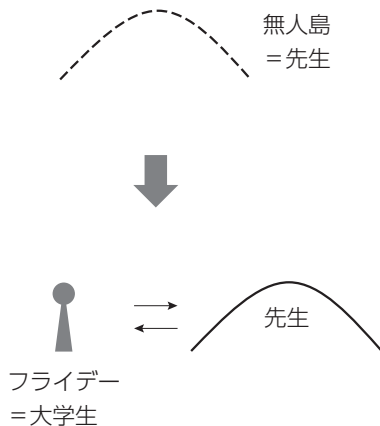


図2

中動態について

「先生」は大学生の「私」に語るべきことは語つた。しかし、それは「先生」にとつてどのような意味があつたか。

ここで論を先に進めるために、中動態という概念を新たに導入したい。

中動態とは、一般的には言語学における動詞の態の一種で、能動態と受動態の中間に位置するとされる。古代ギリシアには認められていた

態であったものの、その後ぼぼ忘れ去られた概念であったが、國分功一郎氏が『中動態の世界』（医学書院、二〇一七）で現代に蘇らせたものだ。

國分氏によれば、「能動と中動の対立においては、主語が過程の外にあるか内にあるかが問題になり、「中動態」は「主語がその座となるような過程を表している」のであって、「主語は過程の内部にある」と定義される。

つまり、こういうことだ。自分の行為というものには無数の原因によってもたらされた結果であり、その過程の中に人間はあるというものの見方である。例としてよく挙げられるのが、人間が生まれること。そこには実際には能動も受動もなく、ただ「生まれる」という過程だけがある、というふうな。

ここで私たちが「先生」が置かれている状況を中動態的な事態として見るとき、つまるところ「先生」の納得のいかなさの正体とは、「先生」自身が自分の意志とは別に動く過程の中で生きてきたこと（國分氏がいうところの中動態的な状況に置かれていたこと）を理解できていなかったことから来るものであったと知れる。そして、「先生」が大学生の「私」に自分の過去を語ることを決意し、自閉的世界から現実世界に身を置き、客観的に自分の言動を整理しているうちに気づいたのが、遺書の最後の方で記された「この不可思議な私というもの」であっ

たのだ。さりげなく書かれているものの、これが中動態的な状況に置かれた自分の姿であるとパラフレーズできることばであるといえる。

ともあれ、ここで「先生」は自分が現在の状況に至った過程を初めて理解し納得したのだと考えられる。「先生」はやつと自分の過去を自分のものとして受け止めることができたのだ。

崩御と殉死という事件

しかし、それだけでは「先生」は死ねない。まだ死ぬる条件が整っただけだからだ。

「先生」が死ぬるようになったのは、やはり外部からやってきた変化による。明治天皇の崩御である。その際、「奥さん」は「殉死」ということばで「先生」をからかうが、その後には本当に乃木大将の「殉死」が続く。そして「先生」はその「殉死」ということばに自分が自殺できるヒントを見出す。

「殉死」とは主君や主人の死後に臣下が後を追って自殺することであるが、そこには当時の世間的な倫理規範とともに一種の愛情も見て取れるものである。それでは「先生」の「明治の精神に殉死する」とはどういうものか。勿論、具体的にはKを追って死ぬことを示す。しかし、それをわざわざ「明治の精神」と表現したのはなぜなのか。

「明治の精神」とは何か

「明治の精神」については現在に至るまで諸家が様々に論じてきたが、私はここでは柄谷行人氏の講演「漱石の多様性」中の「明治二十年代において整備され確立されていく近代国家体制の中で排除されていった多様な『可能性』そのもの」とする説が現在でも最も意味あるもののように思われる。

若き「先生」とKはその可能性の残照の中で学生時代を送っている。それより少し前には『舞姫』の太田豊太郎がドイツから帰国している、そのような時代だ。これは日本が文明としての西洋病に感染する期間のことであり、漱石がその講演「私の個人主義」や「現代日本の開化」で述べる「自己本位」はその次の段階にある態度や姿勢のことであるといえる。「上二十六」で、大学生の「私」が卒業論文を見せた際に、「先生」が全く評価していない感じなのも、その論文が西洋の文物を単に器用に模倣したものに過ぎなかったからであろうと推察される。

「先生」が自分の死の先に見たのは、自分とKがまだ様々な可能性の溢れる中で試行錯誤をしていた明治二十年代の時空間であっただろう。「殉死」とは主君の傍に行くことであるが、「先生」は自分の孤独を淋しがっている尊敬すべきKの傍に行つて、今度は失敗することのないように人生をやり直そうとしたのではないか、自死の先で。

「大人」になった「先生」

國分氏は『中動態の世界』の中で一九二八年に発表された細江逸記という英語学者の論文を引用している。それは中動態論を含むものであったが、國分氏はそこで用いられた「自然の勢い」という概念こそ中動態の意味の根底にあるものとする。

私は、この「自然の勢い」を「先生」に与えたのが明治天皇の崩御と乃木大将の殉死であったのではないかと推測する。

確かに大学生の「私」に説明するために自分の過去を見返すことで「先生」は現在の状況になった経緯は理解できた。ただ彼はまだ観察者として世界の過程の外にいる。そこに崩御と殉死の事件が起こり、「先生」は現実の過程の中に戻される。そして特に乃木の殉死から責任の取り方を示唆される。乃木殉死後の「先生」の興奮はそれを示している。まさに「自然の勢い」を「先生」は与えられたのだ。

罪を犯した責任は、自分の意志ではどうしようもなかったこの世界を終わらせることで取ることが出来る。これは中動態でいうところの過程の座の主II主体として「応答責任」を果たすものといえる。偶然の出来事によって生じた「自然の勢い」が主体をあぶり出し、その主体が全てを消した上で敬愛するKの傍らへと向かうとするのである。(図3)

こうして「先生」は死んでいく。かつて石原

千秋氏は「決して主体になろうとはしなかった」「先生」のことを『「こころ」大人になれなかった先生』（みずす書房、二〇〇五）という書名で評したが、ここで最後に「先生」は「大人」になって死んでいったのだといえよう。

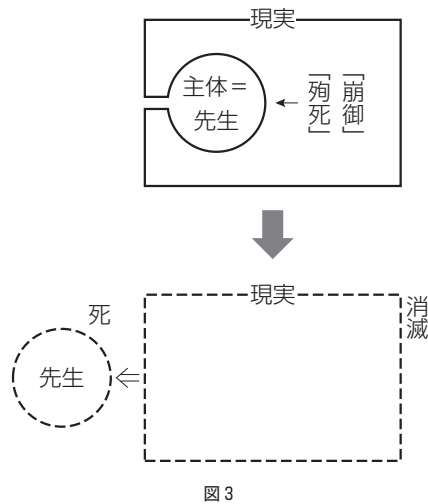


図3

「淋しさ」とは何か

漱石の主人公であった「先生」とKは「心の癖」である「自閉的精神」の持ち主であったが、その個別的な心的傾向が「自由と独立と己れとに充ちた」西欧的原理の個人主義と出会うことで実質的に形式化され、徹底して他から孤絶した生き方をせざるを得なくなってしまうのだ。その中動態的「勢い」を「先生」は「不可思議な恐ろしい力」(『下 五十五』のこと)と記し、その結果生まれた自分とKの様態を「淋しさ」と表現するのだ。そして、この

「淋しさ」から必然的に導かれる袋小路的状况に嵌り込んで「先生」とKはそれぞれの仕方であらうしてしまつたと私は考える。ただこの不幸は実は回避できないものでもない。

精神科医の斎藤環氏はその著書『イルカと否定神学』(医学書院、二〇一四)の中で、ゲリョー・ペイトソンの理論に依拠しつつ、ある種の「学習」によって決定づけられる反応形式のことを「コンテクスト」と呼ぶ。これこそ「心の癖」のことである。そして、斎藤氏は、「コンテクスト」が対話実践によって改変可能であると述べている。これは漱石の主人公たちが自閉的であつても他人と何とかコミュニケーションを取ろうとするやり方を学ぶことで「心の癖」は変えることが可能だということを示唆する。「先生」と大学生の「私」の対話はまさにその実践だったといえる。

一方で、酷薄な西欧的原理については、私たちの文化の中で自己本位のものに変えていくことも出来るだろう。これはまさに漱石自身が講演等で主張していたことである。

それら「不幸の回避」こそ「先生」が死後にやり直したかったことである。漱石は、『道草』で自分の「心の癖」を対象化した後、『明暗』という小説で「先生」のやり直しを「実験」しただけだと思ふ。しかし寿命がそれを許さなかった。